

日露戦争における日本軍の野戦用地図の準備過程

The Preparation of Field Operation Maps during the Russo-Japanese War

小林 茂 (大阪大学・名誉教授)

KOBAYASHI Shigeru (Professor Emeritus, Osaka University)

キーワード：日露戦争、野戦用地図、満洲軍、鹵獲地図

Keywords: Russo-Japanese War, field operation maps, Expeditionary Forces to Manchuria, captured maps

I はじめに

日露戦争に関する地図資料には、戦場で野戦指揮官が使用した地図が極めて少ない。その背景として、野戦用の地図は、記録として戦史編集に利用されることはあっても、当時の軍の情報能力を示すものとして秘密にされ、最終的にほとんど廃棄されたという事情が想定できる。他方、公開戦史掲載図は、戦争終結後の測量によって作製された場合も多く、現場の地形を俯瞰し、戦闘の経過を追うには便利でも、野戦指揮官が利用した地理情報から大きく乖離したものとなった。瀧原 (1928) の指摘する、公開戦史掲載図に関する留意点は、この点への注意を喚起しつつ、野戦指揮官が不完全な地図を使わざるを得なかったことを強調する。

演者は日露戦争における日本軍の地図作製に関連して、2020年の大会では日露戦初期の、2021年の大会では中期から後期の野戦地図を検討した (小林2020; 2021)。本発表は、それを引き継ぐとともに、とくに遼陽会戦 (1904年8月末～9月初旬) から奉天会戦 (1905年2月下旬～3月上旬) に焦点をあわせて、野戦地図の作製と修正を検討し、加えてその編集や印刷に言及したい。

II 利用された地図資料の変化

日露戦争の野戦用地図作製に使われた資料は、戦線の北上とともに大きく変化した。初期は日清戦争末期の臨時測図部の測量による「遼東半島五万分一圖」が広く使われた。同部の5つの測量班が「小測板測斜照準儀 (アリダード) ヲ用ヒテ地形図根点ヲ組成シ此ノ根点ニ依據シ携帯図板ヲ用ヒテ碎部 (細部) 測図ヲ施行」 (括弧内引用者) したもので (アジア歴史資料センター資料JACAR: C06061437600; 『陸地測量部沿革誌稿本』後編63頁)、北緯40度40分以南をほぼカバーするものの、精度が低いと評価された。簡易な測量法に加えて、短期間に広範囲をカバーしたためであろう。これ以北については、鴨緑江渡河作戦で戦死したロシア軍将校のもっていた地形図を拡大したやはり5万分の1図が北緯41度以北までカバーし (JACAR: C13010123400)、「遼東半島五万分一圖」とともに、遼陽会戦までの野戦地図として重要な役

割を果たした。加えて、旅順要塞など主要戦場については、平板測量による2万分の1地形図もあり、カバー範囲は限られるものの、精度は高かった。

しかし、遼陽以北に戦線が北上した中期になると、既成地図は1880年代の陸軍将校の旅行図をもとにした「清國二十万分一圖」以外ほとんどなく、満洲軍總司令部は、遼陽～奉天 (現瀋陽) 間については東亞二十万分一圖「奉天」図幅のほか、「奉天付近十万分一圖」を作成したが、誤りが多かった。またそのために、戦線の東部では1904年9～10月初旬に近衛備混成旅團 (梅澤旅団) が北方に突出して布陣し、南下する優勢なロシア軍により圧迫されて、約18km南方の本溪湖附近まで後退しつつ第十二師団などの応援を受けて、これを撃退するという事態が発生した (瀧原1928)。それをうけて満洲軍總司令部製の地図は大きく修正された。この経緯は、当時の野戦用地図の特色をよく示し、次節で詳しく検討したい。

他方、奉天会戦後の末期となると、戦線は奉天北方に展開し、日本軍はロシア製の地図を翻訳・複製しつつ、それに不足する部分を測量して、野戦用地図を整備していく。この補足には、前線部隊の役割が大きく、元図のロシア製図の縮尺 (8万4千分の1) を変えずに複製し、補足する点が注目される (小林2022a)。

III 遼陽会戦以降、奉天会戦までの地図情報の整備過程

上記のような中期における野戦用図として参照できたものはごくわずかに過ぎないが、以下、上記の梅澤旅団の位置を例にその特色を検討していくこととしたい。

瀧原 (1928: 100) は、梅澤旅団の進出した邊牛堡子という集落の位置が、上記の戦闘前の20万分の1図と以後の20万分の1図では南北に2里半 (10km) の差があるとしている。邊牛堡子が実際よりも10kmも南に示されたため、梅澤旅団は実際には西方にならぶ他の部隊の作る戦線よりも大きく北側に布陣することになったわけである。これは、『明治三十七八年日清戦史、第4巻』の「日露両軍の配置九月十七日」図 (参謀本部1913: 7) にみえる梅澤旅団の位置でも確認す

ることができる。それは北方に展開するロシア軍の左翼側面にあたり、同軍が警戒して攻撃を開始し、10月8日に梅澤旅団に南方に後退するよう命令が伝えられることになった。

この点に注目し、東亞二十万分一圖「奉天」図幅（1904年10月刊、ただし修正補足版）をやはり満洲軍總司令部製の20万分の1図「奉天」図幅（1905年1月刊および同9月27日刊、以下）と比較すると、邊牛堡子の位置が南北に4kmほどずれていることがわかる。このズレは瀧原（1928: 100）の示す数値の半分以下になるが、上記1904年10月刊の図幅は修正補足を受けたものであり、それ以前の図を探索して確認する必要がある。

ところでこれらの20万分の1図の前身となるのが先述の「清國二十万分一圖」である。この149号「遼陽城」、150号「城廠」、154号「奉天府」、155号「撫順城」（いずれも1894年頃刊行、小林編2017: 92）を参照し、南下した梅澤旅団が防衛した本溪湖の位置を20万分の1図「奉天」図幅（1905年9月27日刊）と比較すると、やはり約7km南にずれており、邊牛堡子をふくめて、この一帯が大きく南に偏って図示されたことがわかる。したがって、日露戦争初期の東亞二十万分一圖にみられるこのズレは、「清國二十万分一圖」に始まるものと推定される。陸軍将校の実施したコンパスと歩測によるトラバース測量では、誤差の補正は容易ではなく、以後ロシア製図も入手できずに、日露戦争初期までそれが持ち越されたと考えられる。

なお上記のように、満洲軍總司令部は遼陽と奉天の間については、全4枚よりなる10万分の1図も作製した。奉天会戦期（1905年3月7日）にこの部分修正図（貼り付け用）が第1軍で刊行されているのは注目される。これは上記邊牛堡子よりは北方の地域を図示し、「原図露版八万四千分一圖」と注記されている。一部のカタカナ地名は、ロシア文字表記を全て漢字に直すことができなかったことを示す。臨時に得られた情報を補足して、地理情報をアップデートする努力があったことがわかる。

ところで、1904年秋の沙河会戦以後戦線が膠着し越冬にはいった。その間対峙するロシア軍の陣地図が作られている（小林2022b）。この種の図は遠望だけでなく、雇用した間諜がもたらす情報による場合もあったと考えられる。ロシア側だけを描き、日本側の陣地を描かないのは、それがロシア側に捕獲されて、日本側の情報が漏れるのを防ぐためと考えられる。この点は日露戦争終結後に、野戦部隊が戦史用に作製した図と対照的である。そこではロシア軍側の陣地だけでなく日本側の陣地も合わせ、現地踏査にもとづいて詳細に描かれている。

IV 地図の編集・製図・印刷機能

以上から、日露戦争で日本軍が使用した野戦用地図の多くは、基本的に整備途上にある図で、しばしば修正・補足されるものであったことがわかる。初期の5万分の1図は陸地測量部で印刷されたが、満洲軍が編成されると、野戦用図は現地部隊が作製するようになった。これを支えていたのは満洲軍總司令部やその傘下にあった第一軍～第四軍の参謀部で、野戦用図の編集や製図、印刷を担当した。満洲軍總司令部の場合、参謀部の下士官として当初より陸地測量手の井上井がおり、1904年10月にはそのほかに2名の陸地測量手と4名の雇員が派遣された（JACAR: C09122015900; C09122045300）。他方、ロシア製図の地名の書き換えは、別に派遣されていた通訳が担当したことが功績調書からわかる。また各軍の参謀部にも陸地測量部での勤務経験のある、石版印刷のための要員が派遣されていた（JACAR: C09122056400など）。

日露戦争の陸戦の研究では、野戦用地図への言及は少なく、梅澤旅団の退却のような事態に関連して、その問題点が指摘されるだけで、野戦用図の現物にあたって検証されることはまずない。野戦用図は、戦場の偵察やロシア製図の入手をふまえて頻りに描き換えられ、古いものは不要品として順次処分されたという場合も少なくなかったと推定されるが、野戦指揮官の意思決定に使用されただけでなく、それぞれの時点で日本軍がもっていた地理情報の水準を示し、ときに各地域での地図情報収集の経過を反映するものとして注目される。外邦図の一種として、今後の発掘と検討が期待される。

謝辞

本研究はJSPS科研費：20H01385によった。記して感謝したい。

文献

- 小林茂2020.「中国大陸北部に関する日露戦争初期の日本陸軍の外邦図作製」2020年度人文地理学会一般発表101.
- 小林茂2021a.「日清戦争に際し戦史用に作製された2万分の1地形図」外邦図研究ニューズレター12: 71-80.
- 小林茂2021b.「日露戦争期に日本陸軍が戦況に応じて編集した野戦用地図とその資料」2021年度人文地理学会一般発表209.
- 小林茂2022a.「日露戦争末期の満洲軍總司令部ならびに第一軍作製の野戦用図：解説と目録」外邦図研究ニューズレター13: 47-72.
- 小林茂2022b.「日露戦争における第一軍作製の地図ならびに書類：解説と目録」外邦図研究ニューズレター13: 73-80.
- 小林茂編2017.『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会.
- 参謀本部1913.『明治三十七八年日露戦史、第4巻』東京偕行社.
- 瀧原三郎1928.「地圖の利用と日露戦争に於て我が軍の利用せし圖」偕行社記事641: 93-99.